

## 日本語動詞の音便について

中村雅之

### 1. 音便とは文法的現象

日本語の動詞活用において、いわゆる五段活用の連用形(すなわち子音語幹動詞が「i」を伴った形式)が「-te/-ta」に接続する場合に、音便という現象を生じることが知られている。「書く kak-u : kakite > kaite」「騒ぐ sawag-u : sawagite > sawaide」などのイ音便、「読む yom-u : yomite > yonde」「飛ぶ tob-u : tobite > tonde」などの撥音便、「待つ mat-u : matite > matte」「取る tor-u : torite > totte」などの促音便である。音便が生じるのは「-te/-ta」が接続する場合に限られており、しかも「-ta (および -tara/-tari など)」は「te + ari」から発達した形式であるから、実質的には「-te」の接続が音便を生じさせる唯一の条件ということになる。

重要なのは、音便が純粹に音声環境による変化なのではなく、助詞「te」が引き起こす変化であるという点である。連用形にタ行が続く場合であっても、「書きつつ」「読みつつ」あるいは「書きたい」「読みたい」のように他の語彙では音便は生じない。つまり、助詞「te」が引き起こす音便という現象は、音声的な振る舞いである以前に、非音声的な(つまり語彙的かつ文法的な)振る舞いだと言えるのである。

音便が文法的な現象であることを如実に物語る例がある。「飽きる aki-」という動詞である。現在では通常、母音語幹動詞(伝統的な分類では上一段活用)として活用するが、古語においては子音語幹動詞(四段活用)「飽く ak-」であった。助詞「-te」が付く形は、母音語幹動詞の場合は「akite」だが、子音語幹動詞の場合は「akite > aite」と音便を生じる。後者の例は有名な童謡「ちょうちょう」の歌詞に見える。「なのはに あいたら さくらにとまれ」の「aitara」である。現在では母音語幹動詞「飽きる aki-」が普通になっているために、どうして「akitara」でないのかとしばしば話題になる。このように同じ語で、同じ音声(「akite」)であっても、活用の型によって音便が生じたり生じなかったりする。音便は音声環境よりも文法的な環境に起因する現象なのである

### 2. 子音の脱落と「i」の脱落

いわゆる「イ音便」とそれ以外の「撥音便」「促音便」では性質が異なる。「イ音便」では語幹の子音(k/g)が脱落する。つまり、「kakite」における「i」の前の「k」が脱落して「kaite」になり、「sawagite」の「g」が脱落して「sawaide」になる(後者ではteが有

声化する)。一方、「撥音便」「促音便」では連用形の幹母音「i」が脱落する。「yomite」の「i」が脱落して「yomte > yonde」となったり、「torite」の「i」が脱落して「torte > totte」となるなど。

イ音便と他の音便で脱落する音が異なるのは、おそらくその変化が生じた時期が異なることによるのであろう。つまり、イ音便が生じてから後に撥音便と促音便が生じたのである。それはイ音便に類した子音 k/g の脱落が動詞に限らない一般的な現象であることから推測できる。形容詞における「高き takaki > 高い takai」や名詞における「月立ち tukitati > 一日 tuitati」など、母音間の「k」音の脱落は広く見られる。

### 3. 「i」の脱落

撥音便と促音便における「i」の脱落はいかにして生じたか。前述のように、音便は純粋な音声的变化である前に、文法的な変化である。これを踏まえて、一つの説明を試みてみたい。

まず、動詞活用の型を確認しておく。伝統的な分類では音便の説明に不向きなため、ここでは朝鮮語学でしばしば用いられる語基(=語幹+ )の型による分類を用いる。伝統的な五段活用は子音語幹動詞、一段活用は母音語幹動詞ということなる。否定の「ない」はともに第一語基に接続し、問題の助詞「て」は第二語基に接続する。終止形「-u」や仮定を表す「-eba」は第三語基に接続することになる。

	子音語幹動詞	母音語幹動詞	接続する助詞など
	「読む yom-」	「見る mi-」	
第一語基	- a	-	-nai (否定)/-seru (使役)
第二語基	- i	-	-te/-tai/-tutu/-masu/-nagara
第三語基	-	- r	-u (終止)/-eba (仮定)/-areru (受動)

この活用表を眺めると、音便(撥音便と促音便)とは要するに、助詞「-te」が子音語幹動詞において、第二語基への接続から第三語基への接続へと変化した現象と捉えることができる。「読む yom-」を例に取ると、文語形では第二語基「yomi-」に「-te」が接続するため「yomite」だが、口語形では第三語基「yom-」に「-te」が接続して「yomte > yomde > yonde」となった。このような文法的な変化が複雑な音韻変化をもたらしたのである。もっとも、なぜ「-te」のみが子音語幹動詞において接続する語基を変えたのかという問題は依然として残っている。直感的にはアクセントの移動が関係しているよう

に思うが、なお精査を要する。

#### 4.まとめ

動詞に音便の生じた過程をまとめると、以下の通り。

はじめに、名詞や形容詞をも含む一般的な母音間の「-k-/-g-」の脱落にならって、子音語幹動詞が「-te」に接続する場合に「イ音便」が生じた。

次に、口語形において、理由は不明だが、助詞「-te」が子音語幹動詞の第三語基に接続する形式が生まれ、「撥音便」と「促音便」が生じた。